

才能人応援歌

奨励	今井 このみ [いまい・このみ]
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕(しもべ)たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』」

(マタイによる福音書 二五章一四一三〇節)

履歴書と私

皆さんは、履歴書を書いたことがあるでしょうか。私はつい最近、書きました。それまでにも何度か書いたことがありますが、履歴書を書く度に気持ちが悪く落ち込んでしまうので、提出しなければならない日の前日まで、いつもほったらかしにして目をそらしています。私の気持ちに共感できる方は、いらっしゃるでしょうか。

なぜ、私は毎回履歴書を書く度に、落ち込んでしまうのでしょうか。そして、目をそらしてしまいたくなるのでしょうか。理由は、履歴書の記載事項に、「特技またはアピールポイント」そして、履歴書の種類によっては「あなたの長所を書いてください」という欄があるからです。私は、これを書かされる度に、自分の嫌な面と向き合わされるのです。「特技やアピールポイント、そして長所」を書くはずなのに、逆に自分の情けなさを思い知らされるのです。しかしこうなる理由は、至って簡単明瞭です。自分のアピールポイントや特技、長所がないからです。いや、特技があるにはあるのだけれども、相手（例えば、就職したいと思っている会社など）に自慢できるほどのものではないからです。英語が流暢に話せるわけでもなく、パソコンの能力に長けているわけでもありません。昔、就職活動をしようかどうかどうしようか悩んでいたときに、必死で、自分の長所は何かを考えたことがあります。そのときは、今思えばとても厚かましいのですが、私の長所は「優しさ」だと思っていました。けれども、就職活動をするにおいて、「優しさ」は自己アピールになりません。むしろ、売り上げを重視する会社にとっては、優しさが命取りになると思われるかもしれません。そう考えたとき、やはり私には人にアピールできる特技や長所はないのだという結論に至りました。

できる人にしてみれば、「何か今からでも特技といえるものを作れば良いじゃないか」と言いたくなるかもしれません。でも、それだけの負けん気があれば、すでに履歴書に「負けず嫌いなところ」と書けるのです。しかし、私にはそれだけの負けん気が備わっていません。これだけ何も書くことがないとすると、自分でも「約二十年間何をしていたのだろう」、特に、「大学での学生生活は何をしていたんだ」と自分で自分を情けなく思ってしまう。自分以外の周りの人が、とても輝いて見えて、羨ましく思えます。なぜか、親しい友人ほど羨ましく思え、親しい友人だからこそ悔しい思いも同時にもち合わせます。「なぜ、自分は今まで頑張ってこなかったのだろう・・・」と自分の過去を否定したくなります。

タラントンの譬え話

先ほど読んでいただいた聖書は、天の国の譬(たと)え話です。天の国というのは、死後の世界のことでではなく、神様の国のことを指しています。ですから、「ある人」である主人とは神様のことであり、僕は私たち人間のことを指しているのです。神様が、私たち人間にタラントンを預けている、ということです。タラントンは、元々お金の単位ではなく、重さの単位でした。これをお金に換算すると一タラントンは六〇〇〇デナリオンになります。この時代の一日の給料が一デナリオンといわれていますから、一タラントンとだけ聞くと少ない額に聞こえますが、約十六年も生活することができる大金なのです。自分の財産は、今後の生活に関わるものですから、とても大切な物の一つです。一生涯過ごすことができるほどの大金を、神様が私たち三人の人間に預けたところから話は始まります。

三人の僕が、神様である主人からタラントンを預かった後、どのように行動したのでしょうか。三タラントンと五タラントンを預かった僕は、それぞれそれらを使って商売をするなどして儲けた、しかし、一タラントンを預かったものだけは、土に埋めてしまった、と書いてあります。一タラントンの僕だけが、手で持って預かることさえ、拒んだのです。それを見た主人である神様は怒ってしまいます。なぜ、神様は怒ったのでしょうか。怒りの感情に溢れるほど、お金が欲しかったのでしょうか。しかし、神様がお金に細かい方だとは、今まで聞いたことがありません。神様は金銭面以外のことで怒られたのです。

タラントンは、タレントの語源になった言葉です。タレントとは、日本語に訳すと「才能」になります。タラントンを才能という言葉に置き換えて、読んでみましょう。五つの才能でもいいですが、五つの点数を評価された才能と解釈してもかまいません。五の才能をもつ人は、それらを上手く使って、さらに十の才能、十の才能を得ました。二の才能の人も同じです。でも、一の才能の人はどうでしょうか。隠してしまって、何もしなかったのです。

他の人は、自分よりも多くの素晴らしい才能を預かったのに、自分は一しか与えられなかったから、拗(す)ねて何もしなかったのかもしれませんが。もしくは、彼が言い訳した言葉を信じるならば、神様である主人が恐ろしかったから隠したのかもしれませんが。点数の悪いテストを、親に見せたくないときの気持ちと似ているかもしれません。怒られなくて、隠したのです。確かに、神様は厳しい顔もっています。「悪いことは、悪い」とハッキリと仰せになり、それに対する罰を与えるときもあります。でも、「蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集める」から厳しい、と理解することは間違っています。一タラントンを預かった彼の「厳しい方」という表現は、英語聖書では、“demanding person”となっています。“demanding”とは、「過酷な要求をする」とか「平等ではなく、自分本位の」という意味です。しかし、一五節をみると、主人である神様は、「それぞれの力に応じて、タラントンを預けた」と書かれています。

全員に同じタラントンを預けるのが、平等でしょうか。それとも、一人ひとりの能力に合わせて、タラントンを預けるのが平等でしょうか。平等という面からみると、全員に同じタラントンを預けたほうが正しいように思えます。しかし、自分の能力以上のことを頼まれると大きな負担になってしまい、心が折れてしまいます。神様は、私たち人間には、能力以上のことをお与えにならないのがよいことをご存じなのです。だから、一人ひとりに違うタラントンを預けられました。神様は、自分本位の冷たい方ではなく、私たちのことをよく理解してくださっている優しい方です。

しかし、一タラントンを預かった僕は、主人（神様）のことを正しく理解していませんでした。そのことに神様は怒られたのです。神様が、もし厳しい方ではなく、優しい方だと理解していたら、一タラントンを預かった僕はどのように行動していたでしょうか。

神様から預かったタラントン

神様は、その人の能力に応じて、タラントンをお預けになります。ただ、預けるだけでなく、私たちを信頼して、お預けになるのです。私はもしかしたら、一タラントンの半分の〇・五タラントンしか預かっていないのかもしれませんが。そして、私の友人は自分の倍以上のタラントンを持っているのかもしれませんが。これだけの差を感じると、羨ましい気持ちがないといえは嘘になります。

でも、少し前に、そんな自分をそのまま受け入れてみようと思いました。ずっと逃げていても何も変わりませんし、すぐに死んでしまうわけでもない。生きていかなければならない。だとしたら、こんな自分でも受け入れるしかない、という考えに行き着いたのです。

すべてを受け入れるようにしてから、何か変わったのかと問われれば、大きな違いはまだありません。でも、自分を受け入れることができたために、ありのままの自分でいられることが多くなりました。自分のタラントンを土に埋めて、見つめることを避けていては、できなかったことです。

今日の説教題は、私が好きなバンドのグループが歌っている曲のタイトルをお借りしましたBump of Chickenというグループなのですが、この「才能人応援歌」は、「得意な事があった事 今じゃもう忘れてるのは それを自分より 得意な誰かが居たらから」という歌詞で始まります。この後も、自分の苦しい思いがツラツラと歌われています。しかし、最後には「僕が歌う 僕のためのラララ 君が歌う 君のためのラララ いつか 大きな声 唯一人のための唄 ラララ」で締めくくられています。

まずは手にとってみることに、そしてよく観察して、これで何ができるのか色々試行錯誤してみること。このことが、神様から私たちに託されていることなのです。神様から預かったタラントンは、自分のなかに必ずあります。どうぞ、自分と向き合ってみてください。そして、いつか「ご主人様、見てください」とラララと喜び歌いながらタラントンを神様に差し出せるような、私（僕(しもべ)）になりましょう。

